

伊藤秀真氏学位請求論文の審査報告書

学位請求者	文学研究科 宗教学仏教学専攻 研究員 伊藤 秀真
学位請求論文	『寂円禅師研究』
研究指導教員	文学部 宗教文化学科教授 佐藤 悦成

(I) 概要

宝慶寺を開創した寂円の史料は僅かである。それ故、寂円は後世、「没蹤跡」の禅僧と称された。それは寂円が坐禅修行を中心としていたため、言葉や文字で教えを遺さなかった行実と無縁ではないが、宝慶寺が天正年間（1573-1593）の兵乱に遭い、多くの文書等が焼失したと伝えられることも要因となっている。

寂円は門弟子の中から後継者として義雲を選び、宝慶寺二世として晋住させた。その後、義雲は俗称「三代相論」により荒廃した永平寺に晋住し、中興として混乱した道元禅師入滅後の永平寺を復興させ、永平原始教団の維持に腐心した。義雲の永平寺晋住以降、永平寺住持として、寂円の法系が義雲—曇希—以一と次第し、江戸期の三十八世緑巖巖柳（～1716）に至るまで寂円派下の人々に独占されている。結果、永平寺は寂円派によって護持された寺院であったともいえる。

寂円派が永平寺に与えた影響について考察することは、曹洞宗僧団が形成されていく過程を捉えることと重なる重要なテーマである。本論文は、寂円派の派祖である宝慶寺開山寂円が、如何なる人物であるかの究明を主題としている。

(II) 論文の要旨

次に、本論文の研究方法与本文の要旨について述べる。

本論文は、宝慶寺開山寂円の考究を中心に展開しているが、その研究方法としては、

- i. 伝記類の書誌学的研究
- ii. 寂円と門弟子の行状
- iii. 宝慶寺ほかの寺院の開創と外護者

の三点に分類して整理されており、主要論点について以下に述べる。

i. 伝記類の書誌学的研究

宝慶寺が開創された経緯を捉えるため、伝記史料と宝慶寺に所蔵されている二通の「寄進状」について検討している。

寂円と義雲の伝記史料には、宝慶寺に所蔵されている『宝慶由緒記』がある。『宝慶由緒記』には、宝慶寺開山寂円から三世曇希を中心に、宝慶寺の寺史と寂円を派祖とする寂円派について記されており、末尾には永平寺十三世・宝慶寺十四世建綱が撰したと記されている。建綱の生存時期を考慮するならば、本書は十五世紀中頃に成立したと考えられるが、

近年の研究では江戸時代に纏められた史料ではないかと論じられている点に言及し、最新の研究成果を論考に取り込んでいる。

寂円の行状を考察する上では、『宝慶由緒記』が成立した時期を確定する必要がある。本論文では、近世に成立した『面山広録』の寂円伝と、宝慶寺に所蔵されている「永平寺後住相続=付願書」の両史料を承けて『宝慶由緒記』が纏められたのではないかと考察し、これら三史料を対照して『宝慶由緒記』の史料的位置付けを明らかにしている点が、従来の研究にはない手法であり、本論文の特徴として評価できる。

『宝慶由緒記』の成立が近世と仮定するならば、「由緒記」の性格は、宝慶寺の立場を公儀などに主張するための資料とも考えられ、何らかの係争、または、宗統復古運動との関係を含めて、宝慶寺一門が永平寺住持職を独占的に継承することへの疑義があったとも推察できる。永平寺二十世門鶴（～1615）以降、永平寺住持として晋住するために寂円派に法を転じた者がいることから、永平寺の住持職を寂円派が独占的に継承するために、『宝慶由緒記』、『建擲記』などの著述を利用したと考察しているのはこれまでにない視点である。

次に、宝慶寺が開創された経緯については、開山寂円の史料を通して捉えられるが、寂円の伝記史料の中心となるのは、江戸時代に成立した高僧伝である。この伝記史料の欠点を、宝慶寺草創期の資料である大檀那伊自良氏が、宝慶寺に敷地を寄進したおりの二通の「寺領寄進状」で補っている点も、従来の研究には見られない考察である。

寄進状の一つは、正安元年（1299）十月十八日付けの「知円沙弥等寄進状」、もう一通は貞治四年（1365）七月十八日付けの「円聡沙弥寄進状」である。

この二通の「寄進状」には、宝慶寺の開創について、伊自良氏の知円が関わっていることが記されている。

伊藤氏は、この二通の寄進状に関連する人物を明らかにし、寄進地の領主が誰かを特定することで、宝慶寺が開創された経緯を考究している。

ii. 寂円と門弟子の行状

先述したように、寂円の伝記史料は江戸時代以降に成立したものが多くことから、本論文では寂円の行状を明確にするために、史料の検証を詳細に行っている。

例を挙げれば、江戸期成立の寂円伝は、『義雲語録』を引用して不明部分を補い、内容を膨らませていることを論証し、同様なことが義雲伝においてもおこなわれ、両師の伝記史料に含まれている『義雲語録』からの引用を明らかにしている。

本論文においては、寂円が示寂した時期についても、寂円の出生と同じく後世に編纂された史料によって記述された内容にすぎないと指摘している。寂円の卒年月日については、正安元年（1299）九月十三日と伝記類に示されているが、この示寂年月日がどのような史料に依拠して定められたのかについては今後の解明を待ちたい。

iii. 宝慶寺ほかの寺院の開創と外護者

寂円が開創した寺院については、寂円の史料からは妙法寺と宝慶寺の二箇寺であったこ

とが明らかである。妙法寺は廃寺となっているが、妙法寺は『三大尊行状記』二祖奘禪師章と『延宝伝燈録』越前州薦福山宝慶寺寂円禪師章に、寂円によって開創された寺院であることが記されている。

宝慶寺には、同寺草創期に成立した「寺領寄進状」が所蔵されている。この「寄進状」には、宝慶寺大檀那伊自良氏が寄進した敷地が記載されており、本論文はこの「寄進状」を通して、如何なる人物が宝慶寺の草創期に関わっているのかを明らかにし、また、伊自良氏が寄進を行った敷地は、どのような場所であるのかを特定した上で、宝慶寺が創建された経緯を考察している点が注目される。

また、妙法寺について、福井県下に開創されたことは史料に記載されているが、建立された場所までは特定されていない。しかし、伊藤氏は寂円禪師と白山信仰の関係によって、勝山市比島に妙法寺が存在していたのではないかと推定した。妙法寺が寂円によって開創されたこと等について立証する史料は少ない。故に妙法寺が、比島に建立されていたと仮定して検討を試み、不合理な点が生じないかを慎重に検証している。

このように本論文では、寂円がこの四箇寺を開創した経緯、寺院の所在地、当該寺院の特徴を解明している。

その結果、本論文においては上記の論考方法を踏まえて、

第一章 寂円禪師と義雲禪師の伝記史料について

第二章 寂円禪師伝

第三章 宝慶寺の開創と伊自良氏

第四章 寂円禪師によって開創されたとされる寺院

の四章で本文を構成して結論を導き出している。さらに、附録として「寂円派の宗派図」、「宝慶寺世代表」を加えている。

また、伊藤氏は本論文をまとめるにあたり、従来研究から最新の研究まで網羅的に参照し、寂円が宝慶寺を開いた時期は、道元禪師入滅後に永平寺を離れた後のことと考えられるが、その開創時期を明確に伝えている史料はなく、未だ確定できていない点と、これまで寂円の生涯に焦点をあてた研究はなされているが、宝慶寺に住持中のことに限られている点などを指摘し、その上で自らの説を展開している点にも、従来研究を越えようとする意欲をみることができる。

次いで、寂円を派祖とする寂円派は、宝慶寺二世・永平寺五世中興義雲、宝慶寺三世・永平寺六世曇希へと継承され、曇希へと伝わった寂円の法は、永平寺七世以一に伝えられ、永平寺にて相承されていく法系と、宝慶寺四世等理に伝えられ、宝慶寺にて相伝していく法系とがある（本論文末尾、附録一を参照）点を指摘し、寂円は独自の家風を確立し、宣揚していたと指摘している。

従来の説に従って来朝僧としての寂円が、宋朝禪の禪風を含む故に、日本臨濟禪を包容する宗風にあったとする見方と、道元禪の純粋性を護持、継承して古風禪を展開したとする見方があることに触れて、寂円が早い時期から道元禪師の下にいた点と、塔主に任ぜられたことを通して、寂円は道元禪を継承しつつも独自の家風を宣揚していたと論じ、また、

義雲に伝えられた機関が寂円の所説とみることも可能であると論じている。

寂円が永平寺二世懐奘に嗣法したことから、義雲が永平寺の四世と数えられることを指摘し、『仏祖正伝菩薩戒作法』に記されている「伝法」の世代は、嗣法相承によって数えられたことに依ると論じている。また、義雲が永平寺に入院した時は、永平寺の三世が義介であったにしろ、義演にしろその相論によって第四代が定まらなかったことから、義雲が四代となる可能性について論考した点は注目される。

(Ⅲ) 審査結果の要旨

本論文は寂円の人物像と、開創寺院である宝慶寺の来歴を併せて掘り下げた論考であり、寂円入滅後、寂円派が永平寺に与えた影響について考察することは、曹洞宗僧団が形成されていく過程を捉える重要なテーマである視点から以下の審査を行った。

宝慶寺所蔵「永平寺後住相統=付願書」と『宝慶由緒記』に記述されている「銀椀峯」の地名(山名)は、近世以前には用いられていない。つまり、『宝慶由緒記』は十五世紀に成立したとは断定することができない、と指摘し、さらに、『面山広録』と「永平寺後住相統=付願書」、『宝慶由緒記』の三史料には共通している字句が多いこと、共通した伝承についての記述が含まれている点などから、同書成立の時期を考究した論考はこれまでに例を見ない。また、「由緒記」は、『面山広録』と「永平寺後住相統=付願書」を基にして成立した可能性がある点などをさらに深め、江戸期成立の『洞上聯燈録』義雲禅師章は、宝慶寺三十世龍堂即門が著した『義雲和尚略伝』を踏襲して纏められたことを、両史料の対校により証明した考察は大いに評価できる。

寂円の出生と入滅については、江戸時代以降の記録が遺っているだけであり、寂円が宋国人であると伝えられていることや、出生・入滅に関する事項は、江戸時代以前に遡る史料がないことから、寂円禅師が宋国人であるとは断定できず、日本人僧である可能性をはらんでいると指摘し、宝慶寺外護者伊自良氏出身者と指摘し、さらに絞り込んで、幼少期には知円沙弥と称した人物と比定した考究には見るべきものがある。

さらに、義雲の法嗣である曇希が晩年に行った開版事業を通して、永平寺・宝慶寺に入院した人物が、伊自良氏の出身者である点に言及し、「円聡沙弥寄進状」には、寂円派の嗣承についての記述があるものの、伊自良氏が宝慶寺の寺院運営にまで干渉したこととみるよりも、宝慶寺に住している者が伊自良氏出身の人物であるから、嗣承のことが「寄進状」に記されていることを論じている。伊自良氏が宝慶寺に寄進を行った敷地は、伊自良氏の知行地であることを明らかにした上で、「知円沙弥等寄進状」の四至の範囲内に、現在の宝慶寺の伽藍が建立されていることを証明し、伊自良氏出身の寂円(知円)が、一族の菩提を祀るために宝慶寺を創建したと捉えることが、宝慶寺建立の目的であったと指摘した考察は従来研究にない視点である。

その論証として、瑩山禅師の『洞谷記』に、禅師が弘安五年に宝慶寺を訪ねたと記されていることから、この時には宝慶寺の伽藍が造営されていたことになり、知円の寄進は伽藍が建立した後のことであると指摘し、宝慶寺が創建された時には、宝慶寺の境内地が伊

自良氏の所領であったのであり、その後、知円等の寄進によって宝慶寺領となったのであると考察した点も、広い視野で史料を用い、綿密に考察した論文であることを証している。

(IV) 今後の課題

但し、問題点がないわけではない。敢えて当該研究における今後の課題を指摘するなら、寂円と義雲以降の宝慶寺について、本論文では対象とした時代を超えるため詳述されていないが、研究を継続する上では考究対象とするべき点であり、さらに、永平寺三代相論期における寂円の立場、またその混乱への対応に関する考究が、「坐禅の人」として相論とは一線を画していたとしても、さらに掘り下げる必要がある。また、義雲による永平寺再興の援助者についても、伊自良氏と波多野氏の間を含めて、今後の考察に期待するものである。

(V) 口述試験の結果

平成 28 年 9 月 23 日（金）午後 15 時より 17 時 30 分の 2 時間半にわたり、日進学舎本部棟 2 階ミーティングルームにおいて、審査委員 4 名は論文提出者伊藤秀真氏に対して、論文に関わる口頭試問を実施した。各委員からの質問に対して、論文提出者よりの確かつ適切な回答を得た。

(VI) 結論

上記の審査結果により、伊藤秀真氏の論文は、愛知学院大学学位規則第 3 条第 3 項により、博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、本学位請求論文を合格と判定した。

平成 28 年 10 月 3 日

審査委員

主査 愛知学院大学文学部教授 佐藤 悦成 ㊟

副査 愛知学院大学文学部教授 引田 弘道 ㊟

副査 愛知学院大学文学部教授 中川 すがね ㊟

副査 駒澤大学仏教学部教授 角田 泰隆 ㊟